

このストーリーでは、主体的な率先力の発揮と人との交流を通して、人への気遣いがどのように広がり、深まるかに注目してください。また、驚くべき豊かな結果が生まれることにも注目してください。

長女ティナが九歳ぐらいのあるとき、二人で車に乗って彼女の祖母に会いに行きました。その頃の私は、ティナとの信頼残高を築くことが重要だと考えていました。私は、「車に乗っている三十分の時間の中で、娘の信頼残高に預け入れをするには何ができるだろうか？」と考えました。これにはちょっとした勇気が必要でした。子どもは九歳にもなると、ちょっとした行動から親の考えていることがわかってしまうものです。私は運転中あまりしゃべるほうではありません。ときどき景色を見て雑談することはあるかもしれませんが

人は、見ようと思うものしか見ない。
—ラルフ・ウォルドー・エマーソン—

が、運転中はほとんど黙っています。だから私は、少々不安に思いますが、車庫から車をバックさせて道路へ出るとき、私はこう言ったのです。「ねえ、ゲームをしようよ？　どんなゲームかというのと、『君は素晴らしいと思う、なぜかというところ』とか『君がこんなことをしたのが良かった、なぜかというところ』ってお互い言い合うんだ。この『なぜかというところ』が大切なんだよ。そうすれば、なぜ相手が自分のことを好きなのか分かるからね。いいかい？　始めるよ」

最初、私から娘に対して自分の思いつくことを言いました。それから娘はちよつと考え込んで、私について何か思いつくことを言いました。それが三、四回続いたあと、私は本格的に考え込んでしまいました。これは実にシヨックでした。私は子どもを心から愛していましたが、自分が娘のどんな行動を愛しているか、思いつくのに苦労してしまつたのです。私は何を言うべきか一生懸命探していました。ティナのほうはもつと簡単に思いついていたようです。進む

に連れて、私も気づかないようなことを言うようになりました。娘は私の生活に目を向け、私と私の行動をちゃんと見ていたのです。娘は、私のしている仕事、公園までの散歩、庭先でのバスケットボール、朝の起こし方などに感謝してくれました。娘には私のすべてが見えていたのです。

私はまだ考えあぐねていました。そのうち、この少女の人生に目をやり、彼女自身、そして彼女が私たち家族の中で毎日していることを見つめ直してみると、だんだんと様々なことが見えてきました。娘の抱擁が、ちよつとした言葉の中に、感謝の気持ちが見えてきました。学校の成績がどんなにいいか、どんなに礼儀正しいかが見えてきました。君が学校から帰ってきて、パパを思いっきり抱きしめてくれるのが好きだよ、と私は伝えました。丹念に見つめ直し始めると、二人とも言葉が止まらなくなりました。これはたった三十分のドライブのほずでした。私たちは二十二個、二十三個まで来て、それから中止せざるを得ませんでした。私のほうがもう何も思

いつかなかったのです。正直に言うと、私はこのゲームの結果にとっても驚きました。うれしかった一方で、がっかりもしました。ティナにたくさんのことが見えていた（彼女はゲームを続けたかった）のはうれしかったのですが、自分にあれ以上思いつかなかったのは残念でした。それ以上に大切なのは、残りのドライブを二人ですつとおしゃべりしながら過ごしたことです。あのゲームのおかげで、これまで娘と交わしたことがない対話を始めることができたのだと思います。

到着すると、ティナは車から飛び出して、祖母の家に駆け込みました。そのとき、娘の言葉を聞いた私の胸は張り裂けそうでした。「おばあちゃん、おばあちゃん」娘は叫びました。「パパは私のいいところを本当にいっぱい知ってるのよ。パパが私のいいところをあんなにいっぱい知ってるなんて知らなかったわ」。

「尊敬」という言葉の語源はラテン語の *specto* で、これは「見る、つまり、互いを見る〔第五の習慣：理解してから理解される〕という意味です。自分のことばかりに没頭すればするほど、他人を大切な個人として、あらゆる側面から見ることができなくなってしまう。自分自身から飛び出し、相手に心から傾聴すれば、驚くべき発見の旅が始まるのです。